

主節化と節連結関係の繋がり

—ノデ節を対象に—

桑忠林 (名古屋大学大学院)

要旨

主節化は従属節が単独で使われる現象である。日本語だけではなく、英語やドイツ語やスペイン語にも多く観察される。従属節が主節化することには制約がある。本論文は日本語のノデ節を対象に、節連結関係の視点からその制約を明らかにした。

本稿は従属節と主節の連結関係を「事態の繋がり」の関係、「根拠—判断」の関係、「前提—発話行為」の関係に分類した。用例の考察を通して、「事態の繋がり」の関係と「根拠—判断」の関係では主節化が起きないのに対し、「前提—発話行為」の関係では起きることが分かった。考察結果に対しては、従属節の内部に生じた要素には主節の述語の階層に対して拘束力があると論じた。

1. はじめに

主節化(insubordination)は文字通り従属節が主節のように独立的に使われる現象である。この現象は Evans(2007)によって初めて検討された。英語の例を挙げると、“If you could give me a couple of 39c stamps please.” (Evans 2007)などがある。日本語の例なら、「僕が行くから。」などが挙げられる。この現象の特徴は、従属節しかないのに、文がすでに終わっているという完結感を与えることにある。本稿では主節化された従属節を独立従属節と呼ぶことにする。

Evans(2007)によると、主節化が起きる最初の段階は複文における主節の省略である。それは日本語では多く見られる。「駅に行きたいんですが。」や「僕が行くから。」のような独立従属節はそれぞれ「駅に行きたいんですが、道を教えていただけないでしょうか。」や「僕が行くから、君は行かなくてもいい。」のような複文が主節を省略することによって形成されたと考えられる。しかし、主節化はすべての複文に起きるわけではない。

(1a) 雪が降ったので、電車が止まった。 (角田 2004)

(1b)??雪が降ったので。

(2a) 電車も止まっておりましたので、さぞひどい嵐だったのでしょうか。 (角田 2004)

(2b)??電車も止まっておりましたので¹。

(3a) このようなことは二度と致しませんので、今回はどうぞお許してください。 (角田 2004)

(3b) このようなことは二度と致しませんので。

¹ この文について言えると思う人もいるかもしれないが、その場合、「電車も止まっておりましたので、さぞひどい嵐だったのでしょうか」のような原文とは別の意味になる。

例文の(1a)(2a)(3a)は角田(2004)から引用したものであるが、(1b)(2b)(3b)は筆者が原文をもとに作成した独立従属節である。上記のとおり、同じノデの複文であっても、主節化が起きるものもあれば、起きないものもある。主節化が許容される原因は統語より、複文における意味的な制約にあると推測できる。これは複文と独立従属節との関連を明確にする重要な課題になるが、管見の限り、関連した研究はまだない。本稿はそれを課題とし、節連結関係の視点から、複文において従属節の主節化が起きる際の意味的な制約を解明する。

本稿は中右(1994b)を参照し、複文の節連結関係を「事態の繋がり」の関係、「根拠-判断」の関係、「前提-発話行為」の関係の3つに分類する。そして、それぞれの関係では主節化が起きるかどうかを検証し、主節化の発生に要求される節連結関係の制約を明確にする。次に、野田(1989,2002)と益岡(2007)が指摘したモダリティ階層の観点から考察結果を解釈する。最後に、本稿の内容をまとめる。

2. 節連結関係と主節化

中右(1994b)は英語の条件文を考察し、複文の意味関係を①命題内容領域、②命題認識領域、③発話行為領域に分けている。命題内容領域では、複文は従属節と主節の事態の継承関係や因果関係を表す。命題認識領域では、従属節の内容に基づいて主節が話し手の主観的な確認や判断を表す。発話行為領域では、従属節が話し手側の発話行為を適切に遂行するための留保条件を表す。中右(1994b)を参照し、7冊の脚本の考察に基づき、本稿では、複文の節連結関係を「事態の繋がり」の関係、「根拠-判断」の関係、「前提-発話行為」の関係に分類する。考察対象は従属節の述語が動詞である場合に限定している。以下の3節で、それぞれの関係の用例から代表例を取り上げ、分析を行う。

2.1 「事態の繋がり」の関係

「事態の繋がり」の関係では、複文は因果関係や継承関係など、従属節と主節の事態の繋がりを描写する。従属節と主節の事態を結びつける論理性が感じられる。

(4a) 経営戦略部部长・坂口が又新しい派遣社員の教育を奈央子に頼んできた。

「今の派遣社員がまるっきり役に立たないので、チェンジしてもらった。」

(『アネゴ』)

(5a) (水野の診察室)

水野：構音障害がかなり進行しています。のどの筋肉や声帯がうまく働かないので、
嚥下障害も起きやすい。

潮香：はい。

水野：食事にも毎回注意が必要ですし、何かにつかまらなると歩行も困難です。(中略)
リハビリに励むことを考えられてはいかがでしょう？

(『一リットルの涙』)

(4a)はすでに起こった二つの出来事の連結関係を述べている。派遣社員が役に立たないことが原因になり、チェンジしてもらうことにした。(5a)は(4a)とは少し異なる。主節は具体的な出

来事ではなく、話し手の判断である。しかし、この例はのどの筋肉や声帯がうまく働かないことと、嚥下障害が起きることとの因果関係を描写しており、後で述べる「根拠ー判断」の関係とは区別されている。(4a)(5a)では、それぞれの主節は事態を叙述する、判断を下す、といった意味で異なるが、複文全体は事態間の繋がりを描写している点で共通している。

用例の考察から、この関係にある複文では主節化が起きないことが分かる。あえて主節をなくすと、文全体の意味が通らなくなる。その場合、聞き手が後の内容を確認したり、尋ねたりすることになる場合が多い。

(4b) 経営戦略部部長・坂口が又新しい派遣社員の教育を奈央子に頼んできた。

坂口「今の派遣社員がまるっきり役に立たないので。」

奈央子「それで？」

坂口「全員をチェンジしてもらった。」

(5b) (水野の診察室)

水野：構音障害がかなり進行しています。のどの筋肉や声帯がうまく働かないので。

潮香：そうすると何が起るんですか...

水野：嚥下障害が起きやすいです。

波線部は言語化された聞き手の見当を表している。従属節の内容に基づいた一方的な推測のため、話し手が元々伝えなかった意味とは外れる場合も考えられる。「事態の繋がりに」の関係にある従属節は主節との論理的な繋がりが強い。主節が消えると、従属節だけでは意味を成さなくなる。

2.2 「根拠ー判断」の関係

この関係は従属節と主節の事態の繋がりを描写していない。従属節はある根拠を提供し、主節はそれに基づいて判断を表す。この関係にある従属節は丁寧度の高い文体「ます」を使うことが多いと指摘されている(角田 2004 等)。脚本の考察でこの関係の用例は見つからなかった。論述のために、本稿は角田(2004)の例文を引用する。

(6a)(=2a) 電車も止まっておりましたので、さぞひどい嵐だったのでしょうか。 (角田 2004)

例(6a)では、文末の「のでしょうか」からも分かるように、主節は話し手の判断や推測を表している。電車が止まることは、嵐があったという事態の原因ではない。そして、電車が止まってから嵐があったという継承関係も考えられない。主従属節は、従属節の事態が主節の事態を起こすという繋がりでないため、「事態の繋がりに」の関係と区別されている。

用例の考察では、この関係にある複文には主節化が発生しにくい。あえて主節をなくすと、従属節だけでは意味が通らなくなる。そこで、聞き手が質問などをするようになる場合が多い。

(6b) 佐藤：はあ、電車も止まっておりましたので...

鈴木：家に帰れなかったとか...

佐藤：いや、私の方は大丈夫だったんですが、そちらは嵐がひどかったのではないかとと思ひまして。

「電車も止まっておりましたので。」という文だけでは意味が捉えられないため、「鈴木」は、波線部のように「佐藤」の発話意図を聞いている。

実は、「電車も止まっておりましたので。」という文は単独で使われる場合がないわけではない。

(6c) 電車も止まっておりましたので。

この一文だけでも、ある程度の完結性が感じられる。それは「僕が行きますので。」と共通している。しかし、この場合、ノデ節の発話意図が変わってくる。(6c)の文の主節を補充すると、例えば以下ようになる。

(6d) 電車も止まっておりましたので、家にいなさいと言ったんです。

例(6a)は従属節の内容に基づいた推測や判断の気持ちを表すが、ノデ節が独立的に使われると、(6d)のように相手への勧告を表すようになる。勧告はより上位の言い方で表せば発話行為の一つである。そのため、この場合の節連結関係は「根拠—判断」の関係ではなく、別の種類である「前提—発話行為」の関係になっている。

2.3 「前提—発話行為」の関係

「前提—発話行為」の関係も事態間の結びつきを描写していない。また、「根拠—判断」の関係と同様に、従属節には丁寧度の高い表現「ます」が用いられる。この関係では、従属節は適切な前提を提供し、主節の発話行為を遂行させる。発話行為を表すために、「てください」や「ていただけませんか」といった依頼表現を使う場合が多いが、使わない場合もある。単に形だけではなく、語用論的な判断が必要である²。

(7a) (保護者会)

西野：以上で進路指導に関する議題は終わりましたが、どなたかご質問のある方。

香苗：一つよろしいでしょうか。ちょうど池内さんがいらっしゃるので。

西野：は？

香苗：池内亜也さんのことについて学校側は今後どう対処なさるおつもりなんでしょうか？

(中略)

池内：皆さまには本当にご迷惑をおかけしています。娘も十分それは分かっています。

私どももいたしましても、できるかぎりのことはするつもりですので、どうか

² 角田(2004)もすでに同じことを言っている。角田(2004)は2つの例を挙げた。「この薬を飲むと治る」と「この薬を飲むと治るよ」。前者は話し手自身の判断を表す。後者は話し手自身の判断だと考えてもよいが、誰かにこの薬を飲むように「助言」しているとも考えられる。

もう少し娘が東高にいられるように助けてやっていただけませんか。

香苗：十分やってるじゃありませんか。そのせいでウチの早希は2学期の成績が落ちてるんですよ。

(『一リットルの涙』)

(8a) (病院の診察室)

医者：この血液検査のデータを見るかぎり貧血ではないですね。

潮香：でも睡眠不足だったり、ホルモンのバランスが崩れてるとかそういうことだってありますよね？

医者：いえ、それらを示す所見はこのデータには見当たりません。

潮香：今度、娘連れてきますので、診ていただけませんか？

医者：常南大で診てもらったんなら、間違いないと思いますが。

潮香：でも・・・

(『一リットルの涙』)

(7a)の主節は、娘さんが東高にいられるように助けることを要請するという発話行為を表す。従属節はその発話行為が遂行されるように、私たちもできる限りのことをやるという前提を提供している。それによって、要請に対する相手の抵抗感を和らげることができる。(8a)も同様に、医者に診てもらおうという発話行為が順調に遂行されるように、娘を連れてくるという前提を提供している。

例文の考察では、この関係なら主節化が許容される。

(7b) (保護者会)

西野：以上で進路指導に関する議題は終わりましたが、どなたかご質問のある方。

香苗：一つよろしいでしょうか。ちょうど池内さんがいらっしゃるので。

西野：は？

香苗：池内亜也さんのことについて学校側は今後どう対処なさるおつもりなんですか？

(中略)

池内：皆さまには本当にご迷惑をおかけしています。娘も十分それは分かっています。

私どもといたしましても、できるかぎりのことはするつもりですので。

香苗：十分やってるじゃありませんか。そのせいでウチの早希は2学期の成績が落ちてるんですよ。

(8b) (病院の診察室)

医者：この血液検査のデータを見るかぎり貧血ではないですね。

潮香：でも睡眠不足だったり、ホルモンのバランスが崩れてるとかそういうことだってありますよね？

医者：いえ、それらを示す所見はこのデータには見当たりません。

潮香：今度、娘連れてきますので。

医者：常南大で診てもらったんなら、間違いないと思いますが。

潮香：でも・・・

(7b)と(8b)では、形式上、ノデの従属節だけが残っている。しかし、文がそこまでですでに終わっているという完結性を与えている。独立従属節を発話した際に、相手に相応する行動をしてほしいという話し手の意図が扱み取れる。

「根拠－判断」と「前提－発話行為」のどちらにおいても、従属節は「ます」のような丁寧度が高い文体を用いる。しかし、文末に「ます」が使われるノデの従属節を独立従属節と認めれば、文の意味は自然と「前提－発話行為」の関係になる。それは「根拠－判断」の関係では主節化が許容されないためである。例(6c)の意味が「前提－発話行為」に変わったのはそのためである。

以上、「事態の繋がり」の関係、「根拠－判断」の関係、「前提－発話行為」の関係における主節化の可否の状況を考察した。「事態の繋がり」の関係と「根拠－判断」の関係では主節化が起きないが、「前提－発話行為」の関係では起きることが分かった。主節化が起きるには、「前提－発話行為」という節連結関係が必要であると考えられる。「根拠－判断」の関係の従属節も主節化が起ころうだが、主節化が起きる場合、節連結関係は「根拠－判断」ではなく、「前提－発話行為」になる。そのことは、「前提－発話行為」こそがノデの主節化における節連結の制約であることを証明している。

3. 結果解釈

3.1 主節の述語の階層に対するノデ節の拘束力

野田(2002)は節の内部構造という観点から、節の内部に出現する要素によって様々な従属節を分類した。ノデ節は、内部に生じる最高階層の要素がテンスなので、テンス階層節に分類される。野田(2002)の考察では、ノデ節に現れる要素は述語の語幹、ヴォイス、アスペクト、肯定否定、及びテンスで止まっており、それ以上の対事的モードと対他モードの生起が許容されていない。

また、野田(2002)は主節の述語の階層構造との呼応関係から従属節を分類した。常用の従属節は以下のように分類された。

表1 主文述語の階層構造からみた節の種類 (野田 2002)

節の種類	節の例
語幹階層節 (ヴォイス階層成分)	<u>早く逃げろ</u> と叫んだ。
アスペクト階層節	<u>喜んで</u> 資金の援助をした。
肯定否定階層節	<u>テレビを見ながら</u> ごはんを食べている。
テンス階層節	<u>よく見ずに</u> 買った。
対事的モード階層節	ぼくは <u>生まれたとき</u> 、体重が少なかった。
対他モード階層節	<u>安いので</u> 買った。 環境はいいけれど、不便です。

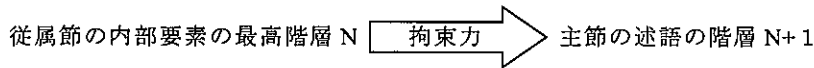
野田(2002)において、ノデ節は、主節の述語の対事モード階層に呼応しているため、対事的モード階層節として分類された。つまり、ノデ節の内部構造に生じる最高階層の要素がテンス

であるため、接続助詞を含めたノデ節の全体はテンス階層より1つ上の、主節の述語の対事的ムード階層節と呼応している。

表2 階層からみた節と内部構造からみた節の相関関係（野田 2002）（一部）

節の例	階層からみた節	内部構造からみた節
～ながら	アスペクト階層節	ヴォイス分化節
～ずに	肯定否定階層節	アスペクト分化節
～とき	テンス階層節	肯定否定分化節
～ので	対事的ムード階層節	テンス分化節
～けれど	対他的ムード階層節	対事的ムード分化節

この相関関係を考えると、従属節の内部に生じた要素の最高階層がNであれば、接続助詞を含めた従属節全体が主節の述語のN+1の階層と呼応すると予測される。この呼応関係がすでに公式のように固まっているため、従属節内部に生じる最高階級の要素がNであれば、主節の述語の階層は少なくともN+1に達しなければならないと推測できる。すなわち、従属節の内部に生じた最高階層の要素は、主節の述語の階層において拘束力を持っていると考えられる。公式で示せばこのようになる。



野田(2002)で、ノデ節に現れた文末形式はすべて常体であり、丁寧さを表した「ます」は考えられていない。したがって、ノデ節の内部に現れる最高階層の要素がテンスであるため、ノデ節は主節の述語の対事的ムード階層節と呼応しているという結論に至っている。しかし、実際、常体だけではなく、丁寧さを表す敬体の「ます」もノデ節の内部に現れうる。「ます」を考慮すると、ノデ節と主節との呼応関係は少し変化するだろう。

益岡(2007)は文の意味的階層と文法カテゴリーの位置関係を以下のようにまとめた。

- 一般事態の階層：ヴォイス
- 個別事態の階層：アスペクト・テンス
- 判断のモダリティの階層：モダリティ（判断のモダリティ）
- 発話のモダリティの階層：モダリティ（発話のモダリティ）

（益岡 2007 P21）

益岡(2007)は「です/ます」を丁寧さのモダリティとして発話のモダリティに位置づけている。しかし、益岡(2007)の発話のモダリティは野田(2002)の対他的ムードが表すモダリティとは少し異なる。益岡(2007)は発話のモダリティを発話類型のモダリティ（「～なさい」などの要素で表現される）、丁寧さのモダリティ（「です/ます」で表現される）、対話態度のモダリティ（「ね」、「よ」、「よね」などで表現される）に分けている。それに対して、野田(2002)は対他的モダリティについて定義をしていないが、用例を観察すると、益岡(2007)が指摘した発話類型のモダリティと対話態度のモダリティ、すなわち、一般的に認識されている対人的モ

ダリティのことを指していると考えられる。

一般的に認識されている対人的モダリティは、具体的な表現形式に関わらず、多少、働きかけの意味があると言えよう。「～てください」や「～なさい」などの相手に対して直接、命令を表す表現形式はもちろん、「ね」や「よ」のような相手に情報を確認したり、新しい情報を提供したりする表現形式も、「知識状態を変えてほしい」というような、相手に何かをやってもらいたい意味が感じられる。しかし、丁寧さのモダリティはそのような働きかけの意味があまりない。ただし、相手に敬意を表す角度から考えると、若干、対人的なニュアンスが読み取れる。その一方、「です／ます」はある事態に対して断定をしたり、習慣的な、または未来の動作を述べたりする面において、対事的モダリティの性質もあると考えられる。そのため、本稿は丁寧さのモダリティを対事的モダリティと対人的モダリティの間に位置づけることにする。丁寧さのモード（「です／ます」）階層を対事的モード階層と対他的モード階層の間に位置づける。

このように考えれば、野田(2002)が指摘した文構造を以下のように修正できる。

[[[[[[[[述語の語幹] ヴォイス] アスペクト] 肯定否定] テンス] 対事的モード]
丁寧さのモード] 対他的モード]

ノデ節に関して、内部構造から見ると、丁寧さのモード「ます」が現れるため、丁寧さのモード分化節として分類されるべきである。主節の述語の階層との呼応関係から考えれば、丁寧さのモード階層より1つ上の対他的モード階層節に呼応していると推測される。つまり、「ます」がノデ節の内部構造に現れるため、主節の述語が対他モード階層節であることを招請している。

3.2 節連結関係とノデ節の拘束力

「事態の繋がり」の関係においては、「ます」の表す対他的モードは顕在化しないため、呼応する主節の述語の階層は対他モード階層でなくてもよい。形式的に、主節に対他的モードが現れる必要もない。その結果、主節のモードは特定できなくなる。「前提－発話行為」の関係においては、ノデ節に対他的モードの「ます」が言語化されているため、呼応する主節の述語は対他的モード階層でなければならない。しかし、この場合、ノデ節の拘束力が主節の対他的モードの存在を保証しているため、主節が対他的モード階層であることを具体的に表す必要はなく、従属節のみを言えば相手に対する働きかけの意味が表される。主節化はその理由で発生していると考えられる。

3.3 「根拠－判断」の関係の特別性

「根拠－判断」の関係においても、ノデ節の内部に生じる最高階層の要素は丁寧さのモードであるため、ノデ節の拘束力によって、主節の述語は対他的モードを持つはずである。しかし、「根拠－判断」の関係では、主節の述語の階層が「でしょう」といった丁寧さのモードに留まっている。実際、「根拠－判断」の関係の用例はめったに観察されない。筆者が現代日本語書き言葉均衡コーパス（通常版）を通して、「ます」が内部に生じたノデ節の50例を考察したところ、「根拠－判断」の関係の用例は2例しかなかった。角田(2004)もこの関係（角田は「判

断の根拠」のレベルと呼んでいる)の主従属節関係を考察したが、小説の地の文(登場人物の会話の部分ではない、物語が綴られる部分)にしか観察されないと指摘している。したがって、「根拠ー判断」の関係は、反例より、むしろ特例ではないかと思われる。

4. おわりに

本稿は中右(1994b)の提案を参照し、複文における節接続関係を「事態の繋がり」の関係、「根拠ー判断」の関係、「前提ー発話行為」の関係に分けた。そして、例文を分析することによって、主節化の発生にとって必要な節連結関係の種類を明確にした。「事態の繋がり」と「根拠ー判断」の関係では主節化が許容されないのに対し、「前提ー発話行為」の関係では主節化が許容される。ノデの主節化が起きる条件として、「前提ー発話行為」の関係が必要であることが推測できる。

考察の結果を野田(1989,2002)と益岡(2007)によって解釈すると、「前提ー発話行為」の関係にある複文は、従属節の内部に丁寧さのムードが生じるため、従属節からの主節に対する拘束力によって、主節の述語に対外的ムードが要請される。その場合、従属節のみを言ったとしても、主節における相手に対する働きかけの意味が保証されるため、主節化が可能となる。

本稿の考察に従えば、ある従属節を独立従属節として認めた場合、その従属節は「前提ー発話行為」の関係にあると自然に解釈されることになる。主節化が発生する際の必要条件として、「前提ー発話行為」という節連結の制約は、スキーマのように脳に定着しているのではないかと考えられる。

【参考文献】

- Evans Nicholas(2007) *Insubordination and its uses. Finiteness: Theoretical and empirical foundations*, Irina Nikolaeva (ed.), Oxford: Oxford University Press.
- 角田三枝 (2004) 『日本語の節・文の接続とモダリティ』くろしお出版
- 中右実 (1994a) 『認知意味論の原理』大修館書店
- 中右実 (1994b) 「日英条件表現の対照」『日本語学』13
- 野田尚史 (2002) 「単文・複文とテキスト」野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則『日本語の文法4 複文と談話』岩波書店
- 益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探究』くろしお出版
- 刘月华・潘文娛・故桦 (2001) 《实用现代汉语语法(增订本)》商务印书馆

【考察データ】

脚本

- 『アネゴ』日本テレビ 2005 脚本：中園ミホ
- 『一リットルの涙』フジテレビ 2005 脚本：江頭美智留、大島里美、横田理恵
- 『ガリレオ』フジテレビ 2007 脚本：福田靖、古家和尚、松本欧太郎
- 『チェンジ』フジテレビ 2008 脚本：福田靖
- 『ドラゴン桜』TBS2005 脚本：秦建日子
- 『ラストフレンド』フジテレビ 2008 脚本：浅野妙子
- 『ロングバケーション』フジテレビ 1996 脚本：北川悦吏子

コーパス

現代日本語書き言葉均衡コーパス（通常版） BCCWJ-NT

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>